

〈資料紹介〉

## 王育徳と二・二八事件

丹羽文生

要旨 第二次世界大戦後、日本の敗戦に伴って蒋介石率いる「中華民国」政府（国府）に接収された台湾に、中国大陆から続々と中国兵や民間人がやって来た。彼らは汚職、腐敗に加え、強盗、万引き、強姦といった暴虐の限りを尽くし、社会全体が乱れに乱れた。そして、ついに台湾の人々の憤怒が爆発し、一九四七年二月二八日、民衆蜂起「二・二八事件」が起こった。すると間もなく中国大陆から派された国府の援軍による無差別殺戮が始まり、反体制派と見做された多くの台湾人が投獄、処刑された。犠牲者数は三万人近いと言われている。これを機に日本に亡命、生涯に亘り「中華民国」体制からの「独立」を目指し台湾独立運動に挺身したのが王育徳だった。本稿は、王育徳が中心となつて結成された「台湾青年社」の機関紙『台湾青年』第六号（一九六一年二月二〇日）の「二・二八特集号」のうち、事件の顛末を綴った「二・二八事件日誌」と、王育徳のエッセイ「兄王育霖の死」を、解説を附して翻刻したものである。

キーワード…王育徳、台湾独立運動、二・二八事件、王育霖、台湾青年社

## 解説

王育徳は「台湾独立運動の父」と評される人物である。二五歳で日本に亡命した王育徳は「一生を台湾の夜明けに捧ぐ」として、台湾独立運動に挺身し、その後、一度も帰国できないまま、一九八五年九月九日、心筋梗塞のため六一歳で激動の生涯に幕を閉じた。

一九二四年一月三〇日、当時、日本が統治していた台湾南部の台南市本町で生を享けた王育徳は、旧制台北高等学校を経て、東京帝国大学文学部に進み、第二次世界大戦末期の一九四四年五月に疎開のため故郷に戻り、翌年八月、終戦を迎えた。二ヵ月後の一〇月、日本の降伏により台湾が戦勝国たる蒋介石の「中華民国」政府（国府）に接収されて間もなく、王育徳は地元の台湾省立台南第一中学（旧台南州立台南第二中学校）の教壇に立つことになった。

その頃、国府によって管理されることとなった台湾に、中国大陸から続々と中国兵がやって来た。台湾の民衆は当初、彼ら外省人を「熱烈歓迎」で出迎えた。ところが、その姿は、戦勝国とは思えぬほど余りに貧相で人々を愕然とさせた。それどころか、自らの力を振り翳して民衆から金品を巻き上げ、微罪で捕まえては保釈金を稼ぎ、汚職と腐敗が蔓延し、さらには強盗、万引き、強姦事件まで惹き起こした。当時の台湾の世相を表した言葉に「狗去猪来」（犬去りて、豚来たる）というものがある。「犬」は日本人、「豚」は外省人を指す。つまり、煩く吠えても番犬としては役に立った「犬」が去った途端、今度は食欲に食い散らかすだけの「豚」が現れたという意味である。民衆の失望は、やがて不満へと変わっていった。

そんな中、王育徳の運命を決する出来事が起こる。「二・二八事件」である。二・二八事件に関する史料や写真を展

示している「台北二二八紀念館」のガイドブックには、その発端について次のように記されている。<sup>(1)</sup>

1947年2月27日の夕方、専売局の闇タバコ取締官は、台北市太平町の天馬茶房の近くで闇タバコを売っていた林江邁という婦人を摘発し、タバコと現金を没収しました。林婦人は泣きながら許しを乞いましたが、取締官に銃把で顔を殴られ怪我を負いました。これを見ていた人々は憤慨し現場を取り囲みましたが、取締官の傳学通が逃げながら発砲した弾が、様子を見ていた陳文溪にあたり誤殺してしまいました。これに激怒した民衆は警察に押しかけ、加害者の取締官を逮捕するように要求したところ、軍や警察はこれに応じなかったばかりか、取締官をかばったため、民衆は憤慨し取締官が匿われている憲兵第四団を一晩中取り囲みました。

王育徳が言うように、「そのきっかけは些細なこと」だった。<sup>(2)</sup>翌日には多くの民衆が専売局台北分局に集まり抗議運動を行い、間もなく台湾省行政長官公署にも大勢の人々が押し寄せた。すると、その屋上から民衆に対する機銃掃射が始まる。台北市内は混乱状態に陥った。

抗議運動は瞬く間に台湾全土へと波及した。積りに積もった人々の苛立ちが一気に爆発したのである。翌々日、戒嚴令を布告、行政長官兼警備総司令の陳儀は、中国大陆において国共内戦の指揮を執っていた蔣介石に援軍の派遣を要請した。こうして事件勃発一週間後の三月八日から凄惨極まりない無差別殺戮が開始される。犠牲となった台湾人は一万八〇〇〇人から二万八〇〇〇人に上ると言われているが、正確な数は未だ分かっていない。中でもターゲットにされたのが名望家や「知識分子」と言われるエリートたちだった。

王育徳の五歳年上の実兄である王育霖も、その一人だった。王育霖は王育徳と同じく旧制台北高等学校に学び、東

京帝国大学法学部在学中に司法試験に合格し、京都地方裁判所検事局の検事となるも、終戦により台湾に帰っていた。台湾台南市にある「王育徳記念館」のパンフレットによると、二人は「将来台湾の為に役立つ人間になろうと誓い合った」という。だが、この時、王育霖は突如として便衣隊に連行され、何の理由もなく殺害されてしまう。

やがて一旦は解除されていた戒厳令が再び布かれ、蒋介石一派による恐怖政治の幕が開くと、その刃は王育徳にも向けられた。そこで一九四九年七月、王育徳は密かに得た出入境許可証で香港に向かい、次いで密輸船に乗って日本に逃げ込んだ。

暫くして三年半に亘って練り広げられていた毛沢東率いる中国共産党軍（紅軍）と蒋介石率いる国民党軍（国民党命軍）との国共内戦が、共産党軍の勝利に終わり、一〇月、中国大陸に「中華人民共和国」が成立すると、敗北した蒋介石は「中華民国」を丸ごと台湾に移した。これにより台湾は国府の完全支配下に入る。

日本亡命後、王育徳は東京大学文学部に再入学し、台湾語の研究に打ち込んだ。それは台湾の将来を考えてのことだった。台湾の新たな「支配者」となった国府によって、台湾語の使用が禁じられ、代わって台湾人にとって未知の言語である北京語を「国語」として強要されたことで、そう遠くないうちに台湾語が消滅する恐れがあるとの危機感からである<sup>3)</sup>。

台湾人の悲劇を解決するには、台湾人が自由に発言する国を作るしかない。それには外国の支援がいる。ところが、蒋介石も、毛沢東も「台湾は中国の一部だ」と言うから、諸外国はそう思い込んで、中国の内政問題なら口出しすまいと思っている。育徳は、台湾人が中国人でないことを証明する方法の一つとして、台湾語のアイデンティティーを明らかにしようと考えたのである。

ここに出てくる「中国」とは、蒋介石からすれば「中華民国」、毛沢東からすれば「中華人民共和国」を意味する。王育徳は、その後、大学院に進学し、文学修士号、そして一九六九年三月には文学博士号を取得した。修士論文のテーマは「ラテン化新文字による台湾語初級教本草案」、博士論文のテーマは「閩音系研究」であった。この間、明治大学商学部で教職に就き、専任講師、助教授、教授へと昇格し、台湾語研究の碩学として名を馳せる。

一方、王育徳は研究・教務の傍ら、一九六〇年二月二十八日に黄昭堂、廖春榮、蔡季霖、黄永純、傅金泉の五人の間と一緒に「台湾青年社」を旗揚げし、機関紙『台湾青年』を発行して、台湾独立運動にも汗を流した。初期メンバーの中には、評論家の金美齡や津田塾大学名誉教授で元台北駐日経済文化代表処代表の許世楷もいた。

『台湾青年』は日本在住の台湾人や留学生は勿論、いくつかの書店で販売、さらにマス・メディアにも配られ、やがて、アメリカを始めとする海外の留学生も読むようになり、王育徳死後の二〇〇二年六月に五〇〇号で停刊するまで実に四二年間に亘って毎月（第九号までは隔月刊）、休むことなく発行を続けた。王育徳は「ペンの力」によって「台湾の状況と台湾人の理想」、即ち「台湾人が自分たちの国を持つ正当性と民主化への希求」を訴えようとしたのである。<sup>①</sup>

中でも特に大きな反響を呼んだのが、第六号（一九六一年二月二〇日）に組まれた「二・二八特集号」だった。国府の厳しい報道規制によって全く外に漏れていなかった二・二八事件が、発生から一四年目にして初めて世間に知られるきっかけとなったからである。

この史料は、その第六号に掲載された二・二八事件の顛末を詳細に記録した「二・二八事件日誌」（表2）と、王育徳のエッセイ「兄王育霖の死」（七六〜八一頁）である。第六号そのものは国立国会図書館を始め、いくつかの大学、公立図書館が所蔵してはいるものの、衆目に触れることは殆どないだろう。以下は、王育徳の次女である全日本台湾

連合会常務理事の王明理女史から、第六号の寄贈を受け、これを翻刻したものである。誤字脱字も散見されるが正確を期すため原文のままとした。加えて「兄王育霖の死」の原文では「西本願寺」、「劉啓光」というキーワードの解説も含まれているが、ここでは省略した。

## 二・二八事件日誌

2月27日 専売局職員台北市大稻埕で騒動を惹起。夜、市民新生報に押しかく。

2月28日 午前、市民専売局を包囲。午後1時、長官公署、市民デモ隊に発砲。暴動起こる。市民代表、柯參謀長に面会。夜、陳儀・黃朝琴・謝娥らラジオ放送。

板橋等台北県下、基隆に暴動波及。

3月1日 午前10時、タバコ摘発不祥事件調査委員会組織さる。午後3時、鉄道管理委員会と衝突。謝娥宅焼き打ちさる。

板橋で供応局倉庫襲撃。基隆で臨時大会開らく。要塞司令部戒厳令を出す。桃園に暴動。新竹にも波及。台中で各界連席会議。彰化で警察局を襲撃。

3月2日 学生大会開らる。午後1時、処理委員会。陳儀第二回放送で譲歩を示す。

新竹で派出所襲撃。二・二八事件処理委員会新竹分会組織さる。北上の国府軍下車して弾圧。台中で市民大会、謝雪紅出馬す。員林で警察局を襲撃。嘉義に暴動。夜、斗北で区署と警察署を襲撃。台南で派出所を襲撃。屏東で市民大会。

3月3日 蔣主席に電報を打ち、「台胞に告ぐるの書」を発表。二・二八処理委員会に政府代表出席せず。特務暗躍を開始。王添灯最初のラジオ放送。

基隆で港湾労働者埠頭軍用倉庫を襲撃。台中で台中地区治安委員会作戦本部成立、市街戦起こる。嘉義で市民大会、市内の軍政機関を制圧。斗六で陳篡地指導の下に鎮民大会。虎尾で飛行場攻撃。台南で市民大会。運河で武装船を焼く。高雄で暴動。

3月4日 全省処理委員会組織さる。政治改革を討論。青年学生別個に武装闘争を準備。新竹で蘇紹文少将、弾圧を開始。宜蘭に暴動起こる。台中で第三飛行機廠投降して全地区を制圧。台中地区時局処理委員会組織さる。呉振武は謝雪紅の軍権を剥ぐ。嘉義で三千名の民軍、飛行場を攻撃。台南でデモ、軍政機関を制圧。高雄全市を制圧。鳳山で民衆大会。屏東で暴動起こって処理委員会組織さる。花蓮港で市民大会、処理委員会組織さる。台東に暴動。

3月5日 処理委員会の機構整備され、長官公署に本省政治改革方案を提出。王添灯ラジオ放送。台中で各地への武器援助を拒絶。嘉義飛行場の国府軍一方で和議を申しこみ、一方で不意打ちを喰らわす。斗六の治安維持会嘉義に救援に赴く。虎尾はなお激闘中。高雄で処理委員会組織さる。徐光明の総指揮部戦果をあぐ。屏東で憲兵隊を火攻めにす。葉秋木臨時市長に推挙さる。

3月6日 処理委員会「全国同胞に告ぐるの書」を発表。処理委員会が台北市分会発足。陳儀増援軍出発の報に接し、夜、第三回ラジオ放送を行なって省民を欺瞞。

台中で謝雪紅は「二七部隊」を組織。嘉義市民飛行場攻撃で悪戦苦闘。高雄は要塞司令彭孟緝大虐殺を開始。屏東で処理委員会組織さる。

3月7日 処理委員会三十二条要求を提出。陳儀の態度豹変す。王添灯最期の放送。台北県で、処理委員会台北県分

会成立。台中では二七部隊武装闘争を準備。虎尾は飛行場を攻略。澎湖では国府軍負傷せる市民に慰謝料を出して事件の拡大を喰いとむ。

3月8日 処理委員会軟化する。夜、国府軍援部隊到着して大虐殺を開始。

憲兵第四団の二個大隊、午後3時、基隆に上陸して弾圧を開始。台中では処理委員動揺し、青年学生は別に組織をかたむ。斗六方面では敗残国府軍を林内平頂に追撃して降伏せしむ。竹山鎮では戦死した張昭田の公葬。台南で暫定民選市長の選挙。屏東では飛行場攻撃軍は鳳山からの国府軍増援部隊に粉砕さる。

3月9日 柯參謀長戒嚴令を布く。警務処長王民寧ラジオ放送。上海から二十一師基隆に上陸してまた虐殺を行なう。国府軍板橋に進駐して虐殺を開始。台中は処理委員会有名無実と化す。嘉義では飛行場の国府軍また和議を申しこむ。

3月10日 ラジオで蔣主席の処理方針を放送。陳儀は処理委員会を非合法団体として取消しを発表。嘉義では民軍の和議代表を逮捕。

3月11日 台中の処理委員会消滅す。台南では南部から国府軍進駐して戒嚴令を布く。

3月12日 台中の民軍埔里に撤退。嘉義では国府軍増援軍空輸されて、虐殺を開始。台南では湯徳章銃殺さる。台東では県長出てきて事務を再開。

3月13日 国府軍宜蘭に進駐して虐殺を開始。台中では国府軍進駐するも民軍を恐れて虐殺を行なわず。嘉義指導者陳復志銃殺さる。

3月14日 国府軍埔里の二七部隊を襲撃せるも撃退さる。二七部隊、能高区署と警察署を攻撃。別の国府軍は水裡坑を迂廻して埔里をうかがう。国府軍、斗六で陳篡地部隊と市街戦。陳敗れて小梅方面の山中に入ってゲリラを始む。

3月15日 警備総司令部民報・人民導報・中外日報・重建日報・和平日報の五紙の閉鎖を命ず。二七部隊投降勧告を蹴る。日月潭の国府軍を襲撃して潰走せしむ。

3月16日 二七部隊、草屯方面で国府軍と決戦。夜、解散して山を下りる。

3月17日 国防部長白崇禧来台して宣撫。花蓮港で虐殺を開始。

## 兄王育霖の死

王育徳

兄がいつ死んだのか、今もってわからない。死体を確認したわけではないのだ。死体が出てこないのをいいことに、初めのあいだ家族は彼がまだどこかに生存しているかもしれないと、信じようと努めてきた。火燒島かどこかに流されて、いつかひよっこり帰ってきそうな気がした。

しかし、彼は瓶に紙切れでもいれて、海に流すことぐらい思いつかないバカな男でない。彼の親筆の一片でも家へもってきて、カネをせびる人もあらわれないところを見るとやっぱりもうこの世には生きていないと考えたほうがよさそうだ。

もつとも二・二八のあの年の晩春のある夜に、彼は右後頭部から左眼窩にかけて、そしてまた右コメカミ辺りに、二ヶ所空洞のあいた頭で、やさしく笑いかけながら、私の寝室に入ってきた。白いワイシャツは、血できたならしくよごれていた。彼は逮捕されたときは、特にトランク一杯に着物を詰めこんでもっていったはずだ。この冷い夜に何もワイシャツ一枚でいることはなからう。私は体を起こして彼をなじろうとした。と、

「徳！頼んだぞ！」

兄の口からそのような言葉がつぶやかれたような気がした。次の瞬間、兄の姿はもう消え失せていた。

それは夢であった。兄の夢は前にも後にもその一回きりであった。

私はこの夢を側で寝ていた女房にも、兄嫂にも話さなかった。私は兄は既に銃殺されたのだと一人で心の底にあきらめていた。

頭部に二発なら、ほぼ即死だろう。即死なら余り苦しまずに死んだだろうと、ただそれだけがせめてもの慰めだった。

私は兄嫂が生れたばかりの嬰兒を背負って街人の噂を頼りに、台北市の郊外の死体出現場をさまよったときの話を憶えている。今日は南港だ、明日は大橋頭だというふうに、兄嫂は兄の死体を見つけたい一心で、こわがりもせずに、死体を一つ一つ当ってみた。施工南だったか、誰だったか、ある著名人は南港（話によれば南港は基隆河の屈折部に当たるところで、当時ここに六七名の著名人の腐爛死体が浮んだという）の泥の中から、キンタマをグシャグシャに蹴破られた全裸の死体を発見されたそうである。それに比べると、銃殺はむしろ恩典であると私は思った。

私の家では遂に兄の葬式を出さずにおわった。葬式の元となる死体や遺骨がないでは話にならない。それに變に行々しく葬式を出すと、政府に対する腹いせだと受け取られないとも限らない、という父母や他の兄弟の懸念もあって、寺で簡単な法会を営んですませた。その法会もいつが命日に当たるかも知らないでやったのだから、変チクリンの連続だ。

なぜ、兄は逮捕され、銃殺されなければならなかったのだろうか。私は今でもその正確な理由罪状を知らない。

母はそれを大稲埕のタバコ売りの老婆のせいにしたがる。あの老婆さえいなければ、二・二八は起こらず、そして

ら兄も殺されることはなかったというのがその三段論法である。

また、妥協を知らず、汚職の仲間入りをしなかったから、そういう目に遭ったのだとも責任を兄に着せたりする。老婆原因説は一笑にふす他ないが、兄の性格説は一理ある。

兄は1944年に、京都地方裁判所で、台湾人最初の検事として奉職した。これには東大の恩師の田中耕太郎氏や小野清一郎氏の推挽があずかって力があつたのである。当時浪人中の私は、ねたみ半分心配半分で、鬼検事はなるなよ、と忠告したものだ。

その兄がたった一度、鬼ぶりを發揮して暴力をふるったことがあつたと私に打ち明けた。ある日本人容疑者が、「キサマは台湾人だ。オレを調べる権利があるか」

とこねたとき、

「何だと！」

と思わず怒つてしまつて、とんでいってピシャピシャ殴つたのだそうである。

兄が1946年の正月に、引き揚げ船で早々と台湾に引き揚げてきたのには、この事件も大きい因素になっている。彼は終戦になると、京都地方の華僑団体の総務部長とかに推挙されて台湾人の世話をし、「祖国のため、故郷のため帰国服務しよう」というスローガンを身をもって痛感し、それを実現に移したのである。

彼は家で半年ほどブラブラしてから、新竹地方裁判所の検察官として赴任した。上役に張という中国人の首席検察官がいたが、病弱で仕事はほとんど兄がやった。

今でわかることだが、当時の新竹地方の政界には大きな濁流が渦巻いていた。その中に兄は知ってか知らずにいたのである。

新竹市長の郭紹宗と新竹県長の劉啓光はどういうわけか仲が悪く、こと毎に対立していた。ところが、郭は民政処長周一鶚（警務処長胡福相かもしれない）の第一の子分で、周は陳儀の第一の腹心と来ていた。一方の劉は人も知る半山の大物で、これもまた相当のバックをもっていたらしい。そういう行政官の対立に、超然としておれなかつたかと残念でならぬのだが、とにかく兄は劉が「認親」して接近してくるのを受け入れた。

しかし、「越人治越、台人治台」（広東人は広東を治め、台湾人は台湾を治める）とか「連省自治」とかのスローガンが華々しく叫ばれて、台湾人の高度自治が盛んに論議されていた当時の政治環境である。兄が半山の劉により親近感を憶えたのも無理からぬことではある。

しかも全島に充満した中国人の貪官汚吏の中でも、ここの郭市長はズバ抜けた超弩級のもので、これがひどく兄の嫌悪を買った。

当時、台湾では未曾有の深刻な食糧難に襲われていた。政府は食糧の積み出しを禁じたが、悪徳商人で密輸をやるものが跡を絶たなかつた。兄は新竹地方の悪徳商人を容赦なくつかまえた。新竹地方始め全島の新聞が兄の快挙豪腕をほめそやし、省民はヤンヤの喝采を送った。商人で泣きついてきて、貿易局が大っ平にやっているのをつかまえないで雑魚ばかりやつつけるのは余りだ、どうか見逃してくれ、とカネを包んでくるものが多かつたが、兄はそれを全部突き返した。

商人の訴えに刺戟されたのか、それとも慎重に内偵を進めていたのか、兄の検挙の手は遂に郭市長に及んだ。何回も出頭を命じたが法の威厳を屁とも思わない連中のこととて、一向に応ずる様子がない。この間、例によって兄の自宅のほうへ人を遣して札束を積み上げて買取を試みる。立腹した兄はとうとう部下の司法警察の一隊を指揮して、市政府を包囲強制捜索するという荒業に出た。後で兄嫂に聞くと、これには劉のけしかけもあつたらしい。

と云つて、劉の子分になりさがるような兄の性格ではない。高校時代、肋膜炎を患つて一年おくれでも、更に大学受験で一年浪人しても、人は人、われはわれ、自分のペースを守つて、逆に在学中高文及第して、むずかしい検事採用に合格した人だ。永い肋膜炎を克服して、カラテ初段の免状を取るといふ健全な肉体と精神のもち主だ。

ただ一つ欠点といえば欠点があつた。それはよく私と喧嘩の元となつた彼の、法律的人生観である。これは私が彼の余りにも折目正しい、融通のきかない一面に憤慨して、たたきつけた悪口だが、そういわれて彼はまだムキになりながらも、満更でもなさそうな顔つきをして、

「うまいことを、じゃ、キミのは何だ」

「オレか、まあ、文学的的人生観だよ」

日本でヤミ物資を買わないために餓死した判事がいたというが、兄はそれほど融通のきかないことはないにしても、そのころの兄の生活は決して楽なものではなく、家からも兄嫂の里からも仕送りしていたほどであつた。兄嫂が眼の前に積まれた札束に生唾を呑みこんだ苦しい心中も察してやれないことはない。

市政府の包囲強制捜査は大向うをうならせる面白い活劇には違いないが、何と兄はここで大ミスをつけてしまった。私の記憶にも怪しい点もあるが、何でも捜査令状を持っていた書記官が、市長のペテンにかかつて、令状をまきあげられたか紛失したかして、逆に不法捜索だと反撃されて、涙を呑んで帰つたとのことである。とにかく市長の検挙には至らず却つて張首席検察官は心労で死に、兄も責任をとつて辞職した。このときの市長の私恨が兄の生命を奪つた最も大きな理由ではなからうか。中国人はエゲツないことをやるから。

検察官をやめても兄は少しも意気沮喪しなかつた。台北に出たかと思つくと、陳文彬氏（同じく引き揚げ組の一人、事件後、大陸に脱出して、現在は中華人民共和国文字改革委員委員、台盟盟員）が校長をしていた建国中学に公民と

英語の教師の職を見つけた。彼は弁護士になる準備をしていた。現職を退いて一年か半年かたたないと、弁護士の認可がおりない。その間の時間稼ぎというわけであった。

しかし、台北の台湾人有力者が兄を一介の中学教師のままに放置するはずがなかった。兄は間もなく林茂生氏や王添灯氏の主宰する《民報》の法律顧問に招聘された。彼がどんな法律問題を手がけたか私は知らない。ただ彼がいつの間にか《提審法概要》という小冊子を著したことを知って、そのエネルギッシュなのに驚いたことがある。私は法律はズブの素人だからその内容は詳しく知らないが、何でも制定されたばかりの中華民国憲法の中に、人を逮捕したら二十四時間以内に、所定の手続を踏んで、釈放するなり継続拘留するなりしなければいけないという趣旨の一項があつて、それを敷衍解釈したものらしい。そんな本を書いた本人が、わけもわからずに逮捕されて、二十四時間はおろか永久に帰つてこなかったのだから、運命というものはまことに皮肉なものだ。

兄と私は二人の光明ある前途を夢見た。もともと台湾のグラックス兄弟になろうと小さいときから誓い合つた仲である。兄は憲法が台湾に施行されたら立法委員選挙に打つて出るつもりだと抱負を語つた。私は演劇文化方面はオレが引き受けた。その代り法律関係のことは頼んだぞ、といい気なことをいい合つたものである。

かれら台北在住の台北高校卒業生は、よく誘い合はして、昔の先生で今はアメリカ領事館の副領事をしているカールの家へ遊びに行ったものだ。カールの家は北門にあつて、行けば飲みものでも食べものでも、それこそ喰いたい放題で、みんなで勝手に怪気焰をあげてはしゃぐ。カールはよく豚に譬えた陳儀の漫画を書いてみなを笑わせるそうである。

二・二八はそのとき起きた。

兄が台南の家を最後にしたのは、その約一ヶ月前の1月31日か2月1日であつた。というのは、1月30日にいっしょ

に高雄市の楊金虎氏（後の国大代表）の令息の冠雄君の結婚式に出席したからである。新郎は台北高校出身の仲間、新婦の錦心嬢はわれわれの幼なじみという姻縁からであった。兄は高雄市では私と別行動に出て、一午后王石定氏と欲談した。王氏の先代の王沃氏は家父とは同じく王姓宗親会の理事で、若い石定氏は兄の名を慕って、ここで父子二代の親交を誓ったのだそうである。王氏は当時では稀にしかない自家用車族の一人で、何十隻という底曳船をもち、市参議員兼漁業組合長であった。王氏との話がすんでから兄はこれで百万の味方を得たも同然だと喜んでた。この王氏も彭孟緝の魔手にかかって兄に先立って惨殺されたのは気の毒この上ない。

台北に暴動が起こったと聞いて、私は兄の身の上を心配したが、まさか逮捕されて殺されようとはつゆ思わなかった。

3月の6日から7日間に、私は兄の長文の手紙と短い電報をほとんど同時に受け取った。電報は米穀通帳至急送れ、配給でいる、というもので、台北の食品難はなるほど想像以上に深刻なものだと憂慮した。手紙は2月28日づけで大体次のようなことが書かれていた――。

昨晚、大稻埕の山水亭で、陳逸松氏（後に大法官）や王井泉氏（山水亭主、演劇界重鎮）らと飲んでるところへ、例のタバコ売りの老婆の傷害騒動が起こった。みなでとび出してデモ騒ぎを見物したが、街中の爆発的なエネルギーを見るに、必ず大きな政治闘争に発展するであろう。われわれの時代は意外にも早く近づいてきたようだ。元気で頑張ろうぜ。なお、私は騒動には少しもタッチしていいから安心するように。

私の心配は忽ち雲散霧消して、逆に血湧き肉躍るのを憶えた。ところが、その後ふつりと消息が絶えた。3月も半ばを過ぎてから親戚のものが手紙で兄が14日ごろ逮捕されたようである、と知らせてきた。家では寝耳に水と驚いて、兄嫂に詳報するよう連絡したがどうしたわけか、さっぱり返事がない。たまりかねて、私が台北に行つて様子を

さぐるうと焦ったが、私自身身辺が危険で家から外に一歩も出られない。

なぜ、私の身辺が危険であったかという点、私はそれまで台南で演劇運動をやって、劇の上で政府を諷刺したり、批判したりしていた。一回は教育処から私が奉職していた中学の校長を通じて、厳しい警告が発せられたほどである。

家は私の他に二人の「勇士」を出していた。二番目の姉婿は台南工学院（元の高工）の教授をしていたが、同校の処理委員会の副委員長になって連日会議に出席していた。すぐ下の弟は四五人の友だちとどこかで銃器を手に入れて、閩朝や佳里の田舎へ戦争しに行っていた。

だから後で憲兵隊が踏みこんできて、父に軽機を突きつけて案内しろといったときは、父はどの部屋に案内しているのかわからなくて困ったのだそうである。結局、姉婿が目的だったが、幸いにこの姉婿はドモリだったので、取り調べにネを上げたか、翌日無事釈放されて、一家平安を神に感謝したのも束の間、兄の凶報が舞いこんで、余計ガクンときた次第である。

半年後、兄嫂は一切の奔走をあきらめて、それこそ尾羽打ち枯らした哀れな姿で、二人の男の子を連れて、台北から引き揚げてきた。プラットホームに兄嫂を見るなり、私の両眼からせきを切ったように涙が流れ落ちた。家につくと私は声を放って泣き喚いた。父は半ばうろたえ、半ば怒って私を叱った。

「ワシがカネを出し惜しんだわけではない。出しようがなかったのだ」

兄嫂が涙にまみれて話す逮捕の日の様子はこうである――。

3月14日だったか、ある日の正午近く、四五名の便衣隊が音もなく、兄夫婦の間借りしている家へ入ってきた。家中のものが呼び出されて男は一人一人、

「キミが王育霖か」

と語気鋭く詰問された。逮捕令状も人相書きももっていない。兄は一瞬間を青ざめたではないとシラを切った。ところが今度は一人一人身体捜査を受けて、洋服の裏のネームを見つけられてとうとういい逃れできなくなった。

「一寸いっしょに来てくれ」

「荷物はいらぬか」

「当分入用なものをもっていけ」

そこで兄嫂はふるえる手で、兄を手伝ってトランク一杯に着換えを詰めて、兄はそれを重たそうにもちながら、遠くに駐車したジープに押しこまれた。兄嫂はその跡を追おうとしたが、殿りをつとめたものに追い払われた。

兄嫂は一面では相当永引きそうだと心配しながらも、一面では微役ぐらいかと自分を慰めたそうである。

兄嫂はそれからベストを尽くして台北市中を奔走して廻った。真先に泣きついて行ったのが劉啓光である。劉は王太太大丈夫です。必ず力になってあげます、と口ではいつてくれたが、毎日同じ言葉を繰り返すばかりで一向に本気に尽力してくれる気配いがない。兄嫂は唇をかみしめ。た仕方なく近くに住んでいた王白淵氏（文化界の大御所、私も兄から紹介されたことがある）にも泣きついてみた。誰、誰と私も憶えていないぐらいに多くの人に助命を嘆願した。

その後、確か3月23日ごろに、ある人が兄嫂に紙切れをもってきた。見ると、自分は西門の西本願寺（憲兵隊との説も）にいる、という兄のことづけで、その人は同室だったのが釈放されたのだそうだ。兄嫂はそれから何日も西本願寺の廻りをうろついた。誰かを介して政府に開いたが、王育霖などつかまえぬ。どこかのゴロツキにさらわれたのではないか、という返事で、兄嫂は天を仰いで慟哭した。

兄が逮捕されたのには、偶然の要素も混っている。

逮捕される二三日前に、兄はカールをたずねて今後の見透しと身の処しかたを聞いている。カールは逃げろといった。カール自身、台北の街をジープで走り廻ったとき、いづくともなく狙撃されて、弾丸がハンドルにあたって、危うく一命を落とす目にも遭った。カールでさえ逃げる準備をしていたところである。兄がカールの忠告を聞きいれてその準備をしたかどうかわからない。あるいは例によって、自分は何もしなかったのだから、という呑気な気持ちでいたかもしれない。

この日はカールが台北を離れる日だったので、兄はその見送りに出かけたのださうである。一旦は家を離れたのである。ところが、途中で財布がないのに気がついて、慌てて家へもどってきた。財布は昨日兄嫂が買物に出たとき、自分の分が足りなくて、一寸兄のを借用して、そのまま兄の背広にもどすのを忘れたのである。兄が家へもどって五分もたたないうちに便衣隊が踏みこんできたのであった。

もし、兄がそのまま家を出ていたら、少くともこの朝の逮捕は免れることができたはずだ。機転のきく兄嫂のことだから、カールの家なり、途中の知り合いの家なり、電話をかけて、兄にそのままかくれよと注意するくらいのことではできたはずである。

母は兄嫂がそつともらしたこの事情を知って、ながい間、兄嫂の不注意が兄を死に至らしめたことを恨んだ。

私も余りいい気もちがしないが、それでも兄嫂を恨むつもりはない。誰が愛する夫をわざわざ死地に追い落とそう。これも運命だと思ふのである。ただ、背広の類のネームのサービスだけは今でもことわり続けている。といって、人間死ぬときは死ぬのだ。ネームや財布の小道具なんかで逆転してたまつたものではない。

しかし、必然的偶然、偶然必然、という言葉は、私にとって単なる言葉の上の遊戯ではない。兄の死という厳肅な実感を伴つて私の五体に沁み渡るのである。

附記

王育霖は1919年、台南市の王汝楨の三男として生まれ、享年29才。なお、邱永漢氏の《檢察官王雨新》は王育霖をモデルにしたものであるが、相当に、小説風に潤色しており、すべてが事実ではない。念のため。

注

- (1) 台北市政府文化局編『台北二二八記念館常設展』（台北市政府文化局・台北二二八記念館、二〇一一年）、四二―四四頁。
- (2) 王育徳『台湾——その苦悶する歴史』（弘文堂、一九六四年）、一四―一頁。
- (3) 王育徳『昭和』を生きた台湾青年』（草思社、二〇一一年）、二九八頁。
- (4) 王明理『『国家百年の計』は台北高校にあり』（『正論』二〇二二年三月号（産経新聞社、二〇二二年）、五二頁。

（原稿受付 二〇二二年一〇月一七日）